

「疫癘の『御文』に見る生死」

当時このごろ 疫癘とてひと死去す

(『御文』四帖目第九通)

この言葉で始まる『御文』がある。今まで幾度も拝読してきた。しかし、今まさに新型コロナウイルスに世界の全てが震撼している現況下で読み返してみた。

改めて着目したのは書かれた時代背景。『御文』の最後に「延徳四年六月 日」とある。この延徳四(一四九二)年は、蓮如上人七十八歳の時である。防災情報新聞の記事には、延徳四年より遡(さかのぼ)ること一四八六年から七年間に渡り疫病が流行り、合わせて飢饉、大雨、大風といわゆる天災に見舞われ、千死一生、多くの人民死すとある。

(出典…『日本災変通史』池田正一郎著)

この『御文』は疫癘・天災が七年も続く中でしたためられたものである。

その中に、読み方によっては中々厳しくもとれる言葉がある。

生まれはじめしよりしてさだまれる定業(じょうごう)なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。

疫病で亡くなったと、おろおろしているが、そんなに驚くことではない。疫病で死んだのではない、生まれたから死んだのだ、と書かれたのだ。死ぬという「果」は、生まれたとという「因」に帰する。あくまでも疫病は「縁」であるとしても言い換えられようか。まさに、生まれれば、老い、病み、そして死す、という仏教の根幹を成す教えが飾りなく簡明直截(かんめいちよくせつ)に表されている。

ある同行にこの『御文』の話をしたら「何か冷たく感じるな」と漏らされた。確かにそうである。この現状下で誰が首を縦に振って頷いて聞けるだろうか。気の利いた労いの言葉の一つも聞けば、少しは癒されることもあるだろう。しかし、蓮如上人は違った。目の前の現実には翻弄される人々に、普遍的な教えに裏打ちされた言葉で向き合った。

とある新興宗教の教祖は、集団感染したことを「サタンの仕業」と言った。それに対し、上人は「生まれはじめしよりしてさだまれる定業(じょうごう)なり」である。言うまでもなく、「無防備に死に往(ゆ)くことを受け入れよ」ということではない。清沢満之(一八六三・一九〇三)の言葉で言い換えるならば「天命に安んじて 人事を尽くす」であろうか。私も翻弄させられている一人ではあるが、時を越え誤魔化すことなく人々を導いてきた言葉に出会い直しをしている。そしてそれは、どんな法律、制度より実は寄り添い続けてきた言葉であったと安心もする。一日も早い終息を願いつつ。

「疫癘の御文」

【原文】

当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりしてさだまれる定業なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。しかれども、いまの時分(じぶん)にあたりて死去するときには、さもありぬべきようにみなひとおもえり。これまことに道理ぞかし。このゆえに、阿弥陀如来のおおせられけるようは、「末代の凡夫、罪業(ざいごう)のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべし」とおおせられたり。かかる時はいよいよ阿弥陀仏をふかくたのみまいらせ、極楽(ごくらく)に往生すべしとおもいとりて、一向一心に弥陀をとうときことと、うたがうこころつゆちりほどももつまじきことなり。かくのごとくこころえのうえには、ねてもさめても、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏ともうすは、かようにやすくたすけます、御(おん)ありがたさ、御うれしさを、もうす御礼(おんれい)のこころなり。これをすなわち仏恩報謝の念仏とはもうすなり。あなかしこ、あなかしこ。

延徳四年六月 日

【現代語訳】

近頃、たいそう多くの人が伝染病にかかって亡くなっております。これは、決して、伝染病によって始めて死ぬのではなく、生まれたときから定まっている業(ごう)の報(むく)いなのです。さほど深く驚くべきことではありません。そうではありますが、今の時分にあたって死去しますと、きっと伝染病によって死んだに違いないというように人はみな思うもので、これももつともなことでありましょう。このように、業の報いによって死んでいかねばならない罪深いわたくしたちであればこそ、阿弥陀如来は、「末代に生きる凡夫の罪業がどれほど深くとも、われを一心にたのみとする衆生を必ず救おう」と仰せられたのです。このような弥陀の勅命があるからには、いよいよ阿弥陀仏を深くおたのみ申し上げて、極楽に往生するに違いないと思いを定め、一心一向に弥陀を尊び、疑うこころをわずかとも持つてはなりません。以上のように心得たうえには、寝てもさめても南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と念仏申すのは、このようにわたくしたちをたやすくおたすけくださる御ありがたさ、御うれしさを申し上げる御礼のこころなのです。これをすなわち仏恩報謝の念仏というのです。